

ホテイアオイ雑話 —序章—

沖 陽 子

(岡山大学農業生物研究所雑草学研究室)



「草家古り堀はしづけき日の照りに台湾藻（ウオターアヒヤシンス）の群落が見ゆ」「橋ぎはの醤油竝倉に西日さし水路は埋むウォーター・ヒヤシンスの花」この白秋が水郷柳川の町で詠んだ有名な歌を御存知だろうか。情緒あふれる町並に、濃緑色で光沢のある葉が水路一面を埋め、密にラベンダー色の花をつけた花梗が陽光に映えて凛と咲き乱れている様子が目に浮かんでくるようである。和名ホテイアオイは、葉柄のふくらんだ部分が布袋さんの腹に似ていることに由来してつけられたが、他にホテイソウ、タイワンナギ、軍艦草など地方によって呼び名が異なる。英名は、Water hyacinth. 水に浮かぶヒヤシンスの花ということだろうか。学名は *Eichhornia crassipes* (Mart.) Solms である。この植物は意外と著名度が高い。小学校の教科書に教材として載せられていたり、水槽を飾る浮き草として店先に出回っている為かもしれない。しかし、現在、この植物は単なる観賞植物に停まらず時代の脚光を浴びていることも事実である。

明治中期に観賞用として渡来し、明治後期から大正初期にかけては既に栽培植物から逸脱して西南暖地では雑草の烙印がおされている。白秋も雑草化したホテイアオイを眺めて诗情を誘われたものと思われる。それほど雑草にしておくには勿体無い花である。ところが、近年の高度成長時代に伴ない水系の富栄養化が進み、これが水界の生物相に異変を与えたことは周知である。ホテイアオイも例にもれず、旺盛な繁殖力という雑草性を武器に異常繁茂を続け公害雑草という名を拝受してしまった。水質汚濁の進んだ窒素及び磷含有量の高い水系を好むの

で薄紫色の花は姿少なくなり、草高60cm以上で葉柄は高密度の為に脹らみが無くなりアキレス腱状を呈し、栄養成長のみを続ける異様な姿を曝す羽目になってしまった。その雑草害及び防除に関しては章を改めて書こうと思う。さて、話をさらに進めよう。単に雑草だけで命を落とさないところに、ホテイアオイへの尽きぬ興味が湧いてくるといえよう。というのは、昨今、食糧問題の将来について、あるいはエネルギー危機に対して世界的に憂慮されており、タンパク質源の開発や代替資源の開発に力が注がれている。特に、太陽エネルギーを固定するバイオマスの利用等がマスコミで大きくとりあげられているが、これらの社会的要求に答えてホテイアオイの利用化が期待されているのである。繁殖力が旺盛で生産力が高いことが認められると、駆除するより積極的に利用できないだろうか考えるのは自然の流れであろう。ここに、有害草から有用草への発想転換が可能であるか探索され始めたのである。最近、特に各方面から、ホテイアオイに対する問いあわせが多く、利用化へのプログラムが着実に進められている。筆者も今年は自然系を利用した水質浄化手法の開発という立場からの本草の利用化に関する調査を委託されており、これまでの生理生態的基礎研究が経済性を含めた利用化の応用面でいかに役立てられるか、また本格的な実用化への橋渡しとなる資料が得られると期待している。農学という応用科学を専攻した以上、常に社会へ貢献できる研究を心掛けており、7年前に初めてホテイアオイに出会った時から、この植物の利用化を胸に秘めていただけに、現在のホテイアオイの位置づけに拍手を送りたい心境である。

少し話が水草から離れるが雑草学が自然科学として体系づけられてからの歴史は浅く、特に我が国では歩き始めたばかりである。雑草学研究室も京都大学、宇都宮大学、岡山大学にしか存在しない。発展途上學問ということだが、それだけに、それを専攻する者の使命は大きい。雑草は常に人間と共に歩む植物である。人間が関与する不安定な環境に好んで適応する為に、生態系の中に組み込まれて生きていることを認めてやらねばならない。従って、雑草を根絶するより管理する方向で自然との調

和をはかった雑草防除体系を検討する必要がある。“雑草管理学”の確立を望んでよいのではないだろうか。筆者は、さらに押し進めて“雑草利用学”も夢みている。厳密に言えば、雑草ではなくなるのだが……。

以上の立場から、ホテイアオイは恰好の研究材料と考えている。いずれにしろ、雑草学は時代に敏感に反応して成長しなければ存在価値が薄れるであろう。水草研究会

の会員の方々からも今後、雑草学に関心を抱いて頂き、色々御指導願いたいと紙面をお借りして念じる次第である。

さて、時代の落し子であるホテイアオイについて、今回は、この植物が置かれている状況を簡単に御紹介した。次回からは諸外国での本草の現況報告もまじえて、分布・雑草害・防除法・生育特性・利用化等の各論に筆を運ぼうと思う。(つづく)

北限のオオカナダモの分布状況について

青森県, 1980.

青森県立三沢高校 大 沢 達 郎

はじめに

1980年8月23日に、青森県上北町において、オオカナダモ、トチカガミ科 (*Egeria densa* (Planch.) Casp., Hydrocharitaceae) が採集された。同定は大滝末男氏によりなされた。大滝・石戸(1980)によると、北海道には分布しない。また、青森県内における採集の記録はない。北限の新産地と思われる。

調査について

オオカナダモはアルゼンチン原産の、沈水性の帰化植物であるが、その北限の分布状況が、後述の通りに予備的に調査された。なお、調査は筆者一人により行なわれた。

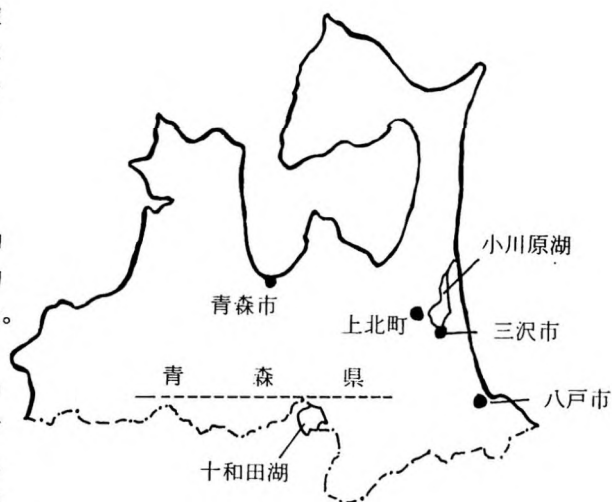
日時：1980(昭和55)年9月3日。

場所：青森県上北郡上北町にある、長さ約1.3kmの水田排水路。花切川を経て、小川原湖へ流入する。以下「花切川排水路」と仮称される。図1.2.

方法：花切川排水路にかかる全ての橋に対して、地点ナンバー(No.1~9)が与えられた。その位置は現地調査に基づき、慎重に1/25000地図上に記録された。水温は同一の棒状アルコール温度計により、川の中程の表面水温が測定された。PHは1~11まで測定可能な、万能PH1~11(東洋濾紙KK)用紙により、その場で測定された。

参考：調査の前の一か月間程は、毎日のように雨が降り続いた。

上北町位置図



結果および考察

オオカナダモは、No.7から9までの約300mに渡り分布していた。被度は85~90%で、川幅5.5mのほとんどを埋める純群落である。底質は腐泥、水質は透明、深さは約50cmで流れはほとんどない。

受光量について：No.1から9の全区間に渡り、ソメイヨシノの桜並木が岸に分布する。No.1~6までは、並木は排水路の湖側のみに分布する。川面には直射日光が当